研究計画書

2022 年 5 月 10 日

所属：看護科・中央検査処置室[1] 西 8 階病棟[2]
主研究者： 山﨑克仁[1]　南部　智江[2]　今本　紀生[2]

研究テーマ
被殻出血発症後、回復期リハビリテーション病院転院前にCOVID-19に罹患した一例
～多職種協働により継続したリハビリテーション～

1．　研究の背景（動機と意義）

COVID-19 感染拡大に伴い、A 病院では COVID-19 専用病棟を稼動開始し、稼動開始以降、COVID-19 専用病棟では呼吸器症状のみならず、様々な基礎疾患や急性疾患を抱える患者と向き合い、生活の再構築に向けた看護を行っている。

患者は被殻出血を発症後、脳外科病棟へと入院し発症 33 日目に回復期リハビリテーション病院へと転院する予定だったが、転院前の PCR スクリーニングで COVID-19 陽性となり、COVID-19 専用病棟へと転床した。この時点で COVID-19 専用病棟では脳外科の患者が入室したことはなく、病棟スタッフの半数以上が急性期の高次脳機能障害や急性期リハビリに関して経験がなく不安な声も聞かれた。

COVID-19 陽性患者におけるリハビリテーションについての先行研究を調べると、入院中のリハビリテーション支援が中止または難渋し、廃用症候群や ADL の低下が見られるといった報告が散見された。また、COVID-19 により炎症性サイトカインの増加から筋骨格系へと影響を及ぼし、筋肉痛や筋肉量の減少をきたすといった影響も考えられている。一方で COVID-19 に対する、リハビリテーションの指針や介入方法を示した報告はなく、感染対策を踏まえたうえで、継続したリハビリテーション支援が必要であると愚考する。その中で、リハビリテーションスタッフと病棟スタッフと協働し、継続的なリハビリテーション支援を行うことでその効果及び課題を報告する。

2．　研究目的

COVID-19 陽性患者に対する、継続したリハビリテーション支援を行うことでの効果及び課題を明確にする。

3．　研究方法

1）研究デザイン：
症例報告、後ろ向き研究

2）データ収集期間
2022 年 4 月 26 日～退院日

3）調査対象者：
A 氏、80 代女性
病名：左被殻出血
症状：右片麻痺、右半側空間無視、失語症（言語による疎通は困難）

被殻出血発症前はADL自立

4）データ収集方法

方法：患者カルテ及びA氏に携わった医療スタッフより以下の項目について情報収集を行う。

・A氏の夜間睡眠状況、看護師が介入した際の内容とA氏の反応、理学療法士が介入した際の内容とA氏の反応、バイタルサイン、FIM点数など

介入方法：西8階病棟において午前午後のROM訓練（15分程度）、午後からの立位訓練および車椅子乗車

上記の具体的な介入方法（理学療法士と相談した上で作成したプラン）を動画にて撮影し、西8階看護師にて実施する。

4．倫理的配慮

1）個人を特定しないように配慮し、研究協力に対する同意書にて承諾をいただく予定である。

2）協力撤回書を元に、協力を辞退できることも説明する。

3）当院の倫理委員会審査を申請する。